

第87回愛知学院大学モーニングセミナー

「からくり人形の世界に行こう!!
—ロボットはからくりの技術から生まれた!—

尾張木偶師 九代玉屋庄兵衛

NPO法人からくりロボット理事長 溝口正成



2013年6月11日

1. 日本における「からくり」の起源と変遷

1. 聖徳太子の時代、遣隋使や遣唐使などを経て、技術としての「からくり」の移入が始まり、その後江戸時代になってそれらの技術が日本独自の発展をした

- a) 日本書紀によれば、658年、唐から帰化僧が指南車を作ったとあり、666年には、指南車が朝廷に献上されたとあるのが日本の「からくり」の始まりと言われている。唐の時代には、一里毎に太鼓を叩く記里故車と指南車が、皇帝の権威のシンボルとして儀式の先頭に置かれるのを常とした。
- b) 室町時代には、明との通商が始まった数十年後に、糸引きからくり人形、台付からくりなどが、奈良の法師によって作られた。
- c) 戦国時代より江戸初期までの間に、日本はヨーロッパの科学技術を積極的に受け入れた。特に鉄砲と機械時計の伝来は、当時の日本人の科学的才能を触発し、それが「からくり」等の大きな飛躍の引き金となった。
- d) 1721年(享保六)、徳川吉宗は享保の改革の中で御新規法度の触書を出した。これは、商人や職人の行う発明・改善に対して、お上を恐れぬ仕業として一切禁止されたのであった。しかし、庶民の祭礼や見世物はこの政策の対象外のものであった。これ以後、「機巧(からくり)」と呼ばれる技術は日本独自の発展形態を辿ることになる

1. 日本における「からくり」の起源と変遷

2. 江戸時代のからくり職人

★ 商品としてのからくり人形制作を職業とした人形師

➤ 細川半蔵(1741~1796)

「機巧図彙」の著者 4種類の和時計・9種のからくり人形の仕組み・製法が記されている。当時のからくりの先端技術が和時計という精密機械、からくりという木製ロボットに集約されている。

➤ 田中久重(1799~1881)

からくり儀右衛門と称され、無尽灯・万年時計等数々の発明・実用品を考案。東芝の創始者。

➤ 大野弁吉(1801~1870)

加賀の平賀源内とも評され、エシキテル・万歩計・ライター・カメラ・測量機器等を製作。

★ からくり芝居や見世物などで「からくり」を製作

* 1662年に大阪道頓堀でからくり芝居を旗揚げした竹田近江。

* 摂津名所図会(1798年)には“この芝居世に高く、東西辺鄙の旅人も竹田唐操を見ざれば大坂へ来いし験なしとぞ聞こえし”と記されている。

* 竹田近江は人形浄瑠璃・竹本座の座元となる一文楽との関係

* 各地で興業一移動科学館

★ 進んだ知識もしくは技術を持ち、間接的にからくりに関係した人達

* 平賀源内、伊能忠敬等、現代では科学者や技術者に入るべき新しいタイプの職



1. 日本における「からくり」の起源と変遷

3. からくり人形の分類

- ★ 内部に機関を持ち、原動力は弾性ばね(鋼、鯨口ひげ等)、水、砂、空気、油、水銀などによって人形を動かす(座敷からくり)



- ★ 人力により糸やさしがねで操作し、仕掛を見せることなく、さながら機関で働くように見せかけるもの(山車からくり等)

2. 尾張北部に山車からくいがなぜ集中しているのか

1. 江戸時代の尾張の祭礼

★ 名古屋東照宮祭

尾張初代藩主徳川義直は、1618年(元和四)、家康の三回忌に東照宮(家康)の祭を始めさせた。東照宮祭にはじめて山車が出されたのは、1619年(元和五)で、大八車二輛を組み合わせた能人形を飾って曳き出され、翌年には弁慶と牛若丸が演ずるからくい人形の「橋弁慶車」を出した。1756年(宝暦六)には、山車九輛が出揃った。いずれも京都祇園祭を模したものが多い。

★ 若宮八幡宮祭

祭礼に初めて山車が出たのは、1671年(寛政十一)であり、1772年(安永元)には、七輛のうち六輛にからくい人形があった。

★ 犬山祭

1635年(寛永十二)尾張徳川の付家老であった成瀬家二代目正虎公の命により始められた。1641年(寛永十八)には、からくい山車が出され、十八世紀中葉には、十三両のからくい山車が出揃った。

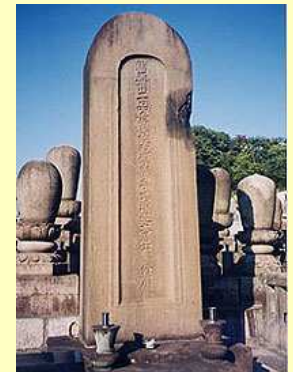


2. 尾張北部に山車からくいがなぜ集中しているのか

2. 八代将軍徳川吉宗と尾張七代藩主徳川宗春の確執

七代将軍に世継ぎの子が無く、本来なら御三家筆頭の尾張から将軍が出されるはずであったが、当時、紀州の吉宗は藩の緊縮財政政策に成功していた反面、尾張の宗春は規制緩和政策が評価されず、吉宗が八代将軍となる。以来、宗春は中央の吉宗に反発し、享保の改革にもかかわらず放漫財政政策を取り続け、生来の派手好き、祭り好きという気性も相まって東照宮祭は史上最大の規模となり、緊縮財政政策で職が成り立ちにくくなっていた京都のからくいの人形師を迎え、盛大な祭りとなった。また、享保の改革で、御新規法度の触書が出されたので、祭礼をかくれみのに精巧なからくい技術が発達した。

尾張北部(犬山)、知多を領有していた成瀬、尾張西部(一宮、津島)を支配していた竹腰の両付家老の領地の町民も、名古屋のからくい人形師に山車からくいを発注するようになり、尾張の祭礼の山車からくいが全盛を極めるようになったものと思われる。



名古屋に実在したからくい人形



大須観音 宗春人形



名古屋水族館 浦島太郎



大須万松寺 信長人形



御園座 白波五人男



2. 尾張北部に山車からくいがなぜ集中しているのか

3. 時計の一大生産地

1605年(慶長十)に津田助左衛門が徳川家康の時計を修理、新規製作し、その技術が高く評価され尾張藩の御時計師におかえられる。以来、名古屋は和時計の一大産地となりその後名古屋は時計技術の中心地として発達したことも見逃せない。

明治以降も、愛知時計・明治時計をはじめ、クロックのメーカー24社が戦前まで掛時計を満州に輸出していた。クロックメーカーは精密機械製造会社へと進化していった。

しかし、山車からくいには、その技術がほとんど活かされていないということは、山車からくいは祭礼、神事のために作られたからくい人形の一つの到達点であると言える。いずれにしても、尾張に和時計の高度な技術者集団が存在していた事実は尾張のからくい師たちに科学的影響を大いに与えたであろう。



2. 尾張北部に山車からくいがなぜ集中しているのか

4. 尾張は富裕の地

★ 濃尾平野

尾張徳川藩は公称62万石であるが、豊かな濃尾平野の米の取れ高は実質100万石だったと言われている。四公六民をみなしの62万石を基礎に計算すれば約25万石が徴税されて、100万石を基礎に考えれば実際の税負担は25%となり、過酷な税負担ではない。さらに物流のハイウェイである木曾川を管理し、東海道・中仙道の二街道が藩を通過している。又、名古屋・熱田の港は大阪―江戸の中間地点に位置している。以上地政学に見ても、経済的・文化的に要衝の地であった。現在、山車・からくいが旧尾張徳川領にかなり集中しているのも、からくいを製作・維持できる町屋等の富裕層が藩内各地に存在していたからだと思われる。

★ 木曾の材木

1615年(元和元年)木曾の山林が徳川家康の配慮により、初代尾張藩主・義直に裏木曾(中津川市)まで含まれ、尾張藩ものもとなった。良質なヒノキ、ホオノキ、ヒメコマツ、カツラなどの木曾材が木曾川を経て伊勢湾に流され、名古屋熱田へ集められた。木曾山林・木曾川を管理した藩は、それが、莫大な収入源となった。

名古屋は現在でもヒノキを中心とした国内最大の材木集散地である。当時のものづくりの原材料の中心である良質な木材を他地域より安価に入手出来た。

からくりとオートマタ(西洋からくり)の比較 による東西機械論(ロボット観)の違い

座敷からくり・山車からくりに共通した日本のからくり人形の特徴は、次のようである。まず、基本的に木製であり、金属、ねじを嫌っている。そして人形の顔は、お面であり口・目などは動かず、頭の動きによって生じる陰影によって感情を表現している。さらに、最大の特徴は、人間を如何に楽しませるか、如何に驚かせるか、を意図にして造られていることである。

一方、1700年代からスイス・フランスを中心としたヨーロッパで盛んになったオートマタ(自動人形)は、日本のからくり人形とは異なる製作意図があったようだ。

中世のヨーロッパには、動物機械論、人間機械論という思想があった。機械が精密化・高度化すれば、いずれは動物や人間と変わらなくなるという思想である。西欧のオートマタは、その影響を受け、機械がここまで進歩して、動物や人間と同じ動作をするようになったという証として製作されたように思われる。

日本人のロボット観の原点である、日本のからくり人形にみる観客を楽しませる事に徹した人間主体の考え方、見る人の感性に訴えた単純な動きによる人形の感情表現法などの共生の思想と西欧のロボットを最初から人間と対比してみる考え方の違いに、風土、精神性の違いを見ることが出来るとも言えるのではないか。

また、日本のロボットの未来もその延長線に読み取る事が出来るのではないだろうか。

- * ロボット : 1921年チェコの小説家カレル・チャペックの「Rossum's Universal Robots」に登場。語源はチェコ語で「強制労働」「奴隷」という意味。
- * ロボット三原則 : 1950年SF作家アイザック・アシモフが著書「われはロボット」の中で唱えた。
 - ロボットは人間に危害を加えてはならない…
 - ロボットは人間の命令に従わなければならない…

デカルトの「心身二元論」

宗教改革(16世紀)によるカトリックとプロテスタントの対立は、キリスト教の真理の解釈の違いを生じ、中世ヨーロッパを支配していた神学の絶対的権威を失墜させた。新たな世界観を構築する考え方として、科学思想が主流をなすようになった。

デカルト(仏・1596~1650)は「機械論的世界観」の中で、世界は物理的法則に従って動いているのであって神や霊などの超自然的存在を持ち込みファジーでファンタジーに主観的に物事を説明することを否定した。

物質である肉体と物質でない精神の二つから成立している世界観に基づき、その関係もあくまでも科学的に解明しようとした。

そうした「心身二元論」では、人形に生命とか精神を宿らせると考える「人形と人」との共生の思想は生じにくい。

「ロボットと人」との関係も同様である。



日本人の英知・みたての世界

日本では、江戸時代より文楽・からくり等大衆興行文化が発展する中で、観客は文楽人形は黒子が操作しているとか、からくり人形は操り手によって動いているということは当然知いながらも、人形には魂が宿り、操り手の意志が人形に乗り移り動いていると「みたてる」ことにより、それらとの良好な共生関係が保たれると考える伝統的思考方法が確立されていった。

現在の東西のロボット観の差違は、以上の点に理由の一つがあるのではないだろうか。



参考文献

- ・甦えるからくり 立川昭二
- ・からくり人形の文化誌 高梨生馬
- ・からくり人形とロボット 鈴木一義
- ・からくり 七代玉屋庄兵衛

